

翻 訳

E・チルコート & R・チルコート 「マルクス主義の危機」

角 田 修 一

ここに紹介・訳出しようとする論文は、Edward B. Chilcote & Ronald H. Chilcote, *The Crisis of Marxism: An Appraisal of New Directions* (マルクス主義の危機：新動向の評価) である。本論文は『Rethinking Marxism (マルクス主義再考)』誌(1992年夏号)の特集「コミュニズム後のマルクス主義」に収められたものであり、同号末にある紹介によれば、著者の1人ロナルド・チルコートは「カリフォルニア大学リヴァースイド校で政治学と政治経済学を教えている」。もう1人のエドワード・チルコートは、ニューヨークにある「ニュースクール・フォー・ソーシヤルリサーチの経済学のドクター・コースにいる大学院生」である。

同誌は、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州アムハーストにある Association for Economics and Social Analysis により年4回刊行されている。同誌の編集委員会には、同地にあるマサチューセッツ大学アムハースト校の教授であるリチャード・ウォルフ、ステイーヴン・レズニック(彼らの共著の1つが平井・滝田両氏の訳で『二つの経済学』として青木書店から翻訳されている)、エルネスト・ラク라우(山崎・石澤訳『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店、横越栄一監訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』柘植書房、がある)などの名前が見られ、かれらの理論については本論文の中でも言及されている。同誌および同組織は、毎年、国際的な研究大会を開催しており、紹介者はたまたま1992年11月、アメリカ留学中に同大会に参加する機会を得(その模様は「Y先生への手紙」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第72号、1993年3月発行を参照)、その時点における同誌の最新号で本論文を知った。日本への帰国直後、複数の研究会でアメリカにおけるラディカル派政治経済学の現状を紹介した際、本論文にある図「新旧の理論的目標」を参考資料として付したところ幾人かの参加者が興味をもたれた。これが訳出のきっかけである。実際、この図に示された欧米(正確には英語圏の)マルクス主義の諸潮流と人の配置については、留学中に知り合った幾人かの研究者に確かめてみたが、ほぼ妥当な配置図であるという感触が得られた。

本論文では、1980年代の欧米マルクス主義の理論的諸潮流の特徴が手際よくまとめられている。論文の構成は、マルクス主義の危機の根源に関する考察をふまえ、1960年代のアルチュセールによるマルクス主義活性化の影響から説き起こし、マルクス主義の再定式化の新しい方向性として、ポスト・マルクス主義、分析的マルクス主義、そして新構造主義の3つがとりあげられる。著者たちの立場はここでいう新構造主義に近いようであり、初期マルクスと成熟したマルクスの区分、個々の理論家の位置づけや評価の仕方には疑問もあるが、例えば、日本では「構造主義」的だと自覚されていない理論潮流が、本論文によれば明確に(じつは)構造主義的(ただし著者たちのいう「新」ではない)であるといったおもしろい「発見」もあろう。

なお、紹介者は、本論文でも言及されているサムエル・ボウルズらアメリカのラディカル・エコノミストの最近の研究成果がマルクス経済学再生のうえで重要であると考える。その一端は、拙稿「抗争の交換と可変資本節約の論理」(『立命館経済学』第43巻第1号、1994年4月)、「協同社会の経済システム」(『くらしと協同の研究』第1号)法律文化社、1994年11月)、および「マルクスのはじまり」(『経済科学通信』第77号、1994年10月)を参照していただければ幸いである。また、「マルクス経済学の危機」について紹介者が考えるところは、いま少し時間を得て、なんらかの形で明らかにしたい。本稿校正中に、若森章孝氏による同論文の紹介に接した(関西大学『経済論集』第44巻第2号、1994年6月所収)。ただし原典の所在が記されておらず、内容もやや異なっている。

は じ め に

この論稿は、マルクス主義の危機に関する根本的な問題提起からはじめて、資本主義と社会主義が左翼知識人の言説にどのように影響してきたかというものの議論をととして、その危機の根源を明らかにする。その中心的なテーゼは次のことを示唆している。すなわち、この危機は資本の停滞と戦後ブームの終焉、官僚的社会主義の行詰りとともに生じたが、それはまた、知識人が現実世界の変動する条件を解明・分析し、前進を確実にする戦略を示唆するために理論と方法論を精密にするにしたがい、その思想と実践および運動をシフトさせることに根ざしていたということである。危機を解決するための闘争においては、マルクス主義を活性化し革新するための2つの大きな試みがあった。第1のものは1960年代のアルチュセールの介在とともに起こり、第2のものは1970年代と80年代のいくつかの新しい動向とともに起こった。本稿は、最初に危機の根源を確定し、簡潔にアルチュセールの与えた衝撃を検討し、さらにアルチュセールとその思想から展開し、あるいはそれに反対して生じた3つの動向（ポスト・マルクス主義、分析的マルクス主義 *Analytical Marxism*、そして新構造主義的マルクス主義 *New Structural Marxism*）の長所と短所の批判的な評価に集中する。本稿は、それらのいずれもマルクス主義の危機の基礎的な問題を適切に解決していないが、マルクスの思想と方法の研究への回帰と、マルクス主義がもっと直接に変化する社会的諸条件に関わるべきであるという認識との両方をととして、危機それ自体がマルクス主義の再考を刺激し、その革新にむけた出発点を提供してきたことを主張するものである。

危 機 の 根 源

第二次大戦の終結以来、変化する諸条件は資本主義と社会主義の両方における危機に影響を与えてきた。国際資本主義経済はとくに、1974年の戦後ブームの終結と資本の停滞によって特徴づけられた。アメリカが戦後世界のヘゲモニーを手に入れることを可能にした諸条件は、ベトナムにおける敗北、兵器の増強、工業能力（とくに鉄鋼生産と自動車生産）における低落、そして主要な技術革新の効果の減退によって掘り崩された。P・ケネディ（1987）はそのベストセラー本で合衆国帝国の衰退についてのべた。J・コルコ（1988）は、資本主義国家が資本のために労働に対して世界的規模で争っている階級闘争と帝国主義的闘争の形態において、世界資本主義経済が体系的に再構成されてきたことに注目している。反対に、社会主義体制の勃興は、経済、政治、社会および文化生活における急進的転換に結果する国内革命（ロシア、中国、キューバ、ニカラグア、北朝鮮、ベトナム、ユーゴスラビア）、あるいはソビエトの指令による外からの強制（中央および東ヨーロッパ）をつうじて発生した。R・ミリバンドは、マルクスが社会と人民による支配への国家の従属を信じていたこと、レーニンが「官僚的歪み」に対して警告を発したこと、そしてスターリンが「巨大国家ブルジョアジーと小ブルジョアジーが著しい権力と優位を獲得する」ことを助けた権威主義的パターンを実行したことなどを正しく指摘した。かれは、ソ連、ポーランド、ハンガリーその他における最近の根本的な改革が「社会主義のこの恐ろしい歪曲」の終わりへの序曲であり、社会主義者は、そのブルジョアの対抗者によるゆき過ぎをチェックするために、勃興しつつある社会民主主義の左翼を圧力団体のように支持するだろうと信じている（1989, p. 55-56）。このように、ほとんどの社会主義諸国における根本的な問題は、市場での実験を必要とした財の生産と分配における官僚的無能さと非効率とともに、政治的空間の欠如にあった。

こうした変化は、実際の解決を求めて、左翼知識人の思考に衝撃を残した。E・ホブズボーム（1989）は、左翼が現在、新しい世界の状況を理解していないこと、残存する左翼の大衆政党のまわりにすべての民

主義者を結集することにより、変化しつつある世界に対応すべきであると考え。B・エーレンライヒ(1989)は、1960年代後半以後の知的左翼の衰退を説明するなかで、かれらの消極性の原因が既存組織を支配する旧い左翼主義者と、参加の機会が少ない地位に追いやられている若い左翼主義者とのあいだの階層的な世代差にあると考える。彼女はさらに、マルクス主義のアカデミズム化(academicization)と多くの左翼知識人の学界への吸収に注目し、そこ(学界)では知識人たちは理論と戦略の問題をめぐる非アカデミックな左翼主義者との議論のために役立たないことに注目する。彼女は知的生産過程の啓蒙をよびかけている。他の観察者は、1968年以来的新左翼における相矛盾した方向性を強調する(フラックス1989, イッサーマン1987, ギトリン1987, ミラー1987など、運動とその消滅に参加した人々による回顧を参照)。R・ヤコビ(1987)はまた、学界と急進的な「著名」知識人たちの低落にたいする告発においてこのテーマを引き出した。P・アンダーソン(1983)は、[左翼知識人の——訳注]知的関わりあいが、初期と1930年代における政党や労働組合への指向から、1950年代と1960年代において研究機関や大学にシフトしているとのべている。この傾向はとくにフランスにおいて、またやや遅れてイギリスにおいて顕著であった。合衆国における左翼知識人のマルクス主義的言説からの離脱はロシア革命以来の出来事に記録される周期的な現象の一部である。多くの知識人が社会民主主義的あるいは新保守主義的傾向にむかって右方向へシフトすることは、1934—1936年のスターリン主義の弾圧、1950年代初期のマッカーシズムの勃興、そして先進資本主義の衝撃の結果であった。A・ブルーム(1986)、T・クーニー(1986)、A・ワールド(1987)は、1930年代以来のこうした左翼とその異端者の関与を描写している。ソ連における知識人に関する記述では、B・カガーリツキー(1988)が、1917年以前とそれ以後の知識人の役割とロシア国家の浸透をのべ、いかに知識人がつねに体制からおきざりにされていたかについてのべている。かれは1968年以後の危機、社会主義の魔法の解放、思想と文化的生産における停滞について書いている。

知的言説のシフトは、マルクスとその追隨者の思想と著作に位置づけられるオルタナティブなマルクス主義に起因する。図は、これらのマルクス主義から生じるいくつかの歴史的な影響を表わす。批判的哲学主義と分析的個人主義は、マルクスの初期の著作からルカーチ、サルトルその他をとおって、個人と選択の役割を強調する最近の解釈にいたる。これに対し、唯物論的集合主義と構造主義は[マルクスの]成熟した著作から発して、レーニン、スターリン、トロツキーを通じて、構造を強調し続ける最近の解釈にいたる。I・ウォーラステインは、1840年代から1883年までのマルクス主義の空想的時代、ドイツ社会民主党が1880年から1920年まで空想主義を拒否し、ポリシェビキが1900年から1950年まで一連の思想を集大成した正統の時代、そして「無数のマルクス主義」という現代を含む、異なる歴史的な文脈を示唆している(1986, p. 1295-1308)。E・ダッセル(1990)によれば、マルクス主義における根本的な論争は1932年の『1844年経済学＝哲学草稿』刊行と、1939年の『グランドリッセ [1857-58年の経済学ノート]』刊行までさかのぼる。なぜなら、これら初期の、また過渡期の著作は、それが刊行された時代に優勢であった正統的で教義的なスターリニズムとの対比において、マルクスの批判的な、しかし科学的な枠組と同様にかれの方法を明らかにするからである。1930年代にさかのぼる論争から引き出されたわれわれ自身の解釈は、3つのマルクス主義を示唆している。1つは、G・ルカーチ、H・マルクーゼ、ドイツ・フランクフルト学派、そしてA・シャフやL・コラコフスキーのような東欧の著作家、そしてユーロ・コミュニズムの著作に見られる。この形態のマルクス主義は、社会民主主義あるいは民主的社会主義に、また教義的マルクス主義の反対者にみられる主意論的でヒューマニスティックなものと考えられる。歴史的には正統で教義的なマルクス＝レーニン主義は、スターリニズム、ソビエト共産党、コミンテルンによって定式化された。この形態のマルクス主義は経済主義的、決定論的で、しばしば科学的社会主義となづけられている。最後に、革命的形態のマルクス主義は、マオイズム(ポスト・毛澤東)、中国文化大革命、ゲバライズム(ポスト・E・「チェ」ゲバラ)そしてキューバ革命のような例によって定式化されている。それは、1968年のパリにおける5月事件や、1974年と1975年のポルトガルにおける革命的展開において顕著なものになった。このマルクス主義はソビエトの修正主義、平和共存、社会主義

本稿の以下の部分では、危機を解決する努力と、マルクスに立ち返る2つの歴史的モメントを検討する。最初のものはアルチュセールとかれの影響の増大と減少および持続によって表される。第2のものは今世紀末までマルクス主義の議論に影響しそうなアルチュセールに対する反動から生じ、あるいはその反動を表現するものである。

図 新旧の理論的目標

批判的哲学主義	分析的個人主義	唯物論的集合主義	構造主義
初期マルクス	——	成熟したマルクス	
ルカーチ、フランク	サルトル	レーニン、スターリン、アルチュセール	
フルト学派		トロツキー	
(ヒューマニズム)			ブーランツァス
(疎外)		コーエン	↓
		(機能主義)	(新構造主義)
ラクラウ&ムフ	コーエン	↓	レズニック&
(ポスト・マル	エルスター	↓	ウォルフ
クス主義)	(方法的個人主義)	ライト	(過程と重層的決定)
		(矛盾の配分)	
ボウルス&ギン	ロエーマ		
タス	(合理的選択)		
ハバーマス	ブルツェヴォルスキ		
(ポスト・リベ	(個人的選択)		
ラリズム)			
	ライト		

マルクスのアルチュセールの活性化

アルチュセールの仕事は、マルクスに立ち戻り、マルクス主義を活性化することにおける重要な契機を代表している。エリオットは、アルチュセールのテキスト（とくに『マルクスのために』とE・バリバルとの共著『資本論』を読む）に限定した、批判的読み方でアルチュセールの思考を分析することによって、またかれの思考（フランス共産党内のかれの多義的な立場、スターリニズムへのかれの批判、文化大革命下のマオイズムに対するかれの親和性）を形づくった政治的・個人的闘争の検討にもとづいて、かれのマルクス主義に肯定的な評価を与えた者たち（ジラス1986、カリニコス1976、ベントン1984、その他）にまで議論を拡大している。エリオット[の著作]は、マルクス主義理論に対するアルチュセールの関与を評価するうえで有益である。「もしアルチュセールの問題構成が問題提起的であるならば、彼の批判の大部分は適切で強力である。それは、史的唯物論を探求プログラムとして再確立し、1つの概念の牢獄より以上のものからマルクス主義を救いだした」（1987, p. 184）。そこで、エリオットは、アルチュセールの哲学的で反経験論的な弁証法的唯物論の理解、彼の生産様式の反目的論的な理論、彼のイデオロギーの区別された概念に注意をむける。これらの業績は、アルチュセール主義のもつ諸問題とバランスされるべきである。その諸問題とは、資本主義の維持に焦点をあてることとイデオロギーの政治的階級闘争を通じてそれを掘り崩す可能性を強調することとのあいだの分裂、国家の諸装置を通じた操作主義と主意主義とのあいだにある未解決の緊張関係、国家と市民社会とのあいだの区別をあいまいにするためにイデオロギー的な国家装置の役割と形態を過大視すること、官僚制の中央集

権主義を改革するためのかれの歴史と提案の不適切さ、西欧マルクス主義の伝統への荒っぽい非難、マルクス主義の非分析的な類型学、史的唯物論の不完全な再構成、である(エリオット1987, p. 225, 233, 311, 337)。エリオットはさらに、豊富な例を引き合いに出しながら、その研究や作品においてアルチュセールによって影響された著者たちとその一連の主要な著作とを評価することにより、アルチュセリアンの研究プログラムの「持続的生産性とバイタリティ」を読み取っている。その例とは、ノルマン封建制と封建的生産様式に関するG・ボイスの研究、ポリシェビキ国家のもとでの農民問題と工業労働に関するR・リンハートの研究、第3共和制下のフランスにおけるイデオロギーと階級闘争に関するP・ショトラーの研究、西欧および東欧における封建制と国家形成に関するP・アンダーソンの研究、イギリス労働者階級に関するG・S・ステドマンの研究、コンゴにおけるフランス植民地主義の影響に関するP・P・レイの研究、資本主義国家に関するN・ブーランツァスの研究、国家構造とイデオロギーに関するG・サボンの研究である(エリオット1987, p. 331-335, 注9-15を参照。主要な仕事を確定するためここで詳細に引用するにはあまりに数が多すぎる)。

1977年11月、ヴェニスにおいて、アルチュセールは公式にマルクス主義の危機を宣言した。これは、その構造(主義)的形態におけるアルチュセールのマルクス主義の衰退だけでなく、マオイストやスターリニスト的バリエーションにおけるマルクス＝レーニン主義、さらにスターリニズムと社会民主主義のあいだの「第3の道」としてのユーロコミュニズムの衰退によっても表現された。このマルクス主義の危機はまた、左翼の新旧世代によるマルクス主義の放棄(L・コレッティ)を象徴したのである。すなわち、資本との革命的断絶についての懐疑主義(N・ブーランツァスは彼の最終インタビューにおいて二重権力についての彼の見方を変更し、議会の価値を宣言した)、そして「政治の終焉」宣言(M・フーコー)である。

フランスでは、スターリンの死と中ソ論争は、スターリニズムの拒絶と2つの方向におけるマルクス主義的言説に道を開いた。一方において、J・P・サルトルとM・メルロ＝ポンティは「近代人の時代」を発見し、一枚岩のフランス共産党に反対した。サルトルは一時、党内で仕事をしたけれども、マルクス主義哲学の発展におけるかれらの努力は党の外において行われた。他方、アルチュセールは党内で仕事をすることによって、彼流のマルクス主義を押し出した。そして、彼自身の計算によって、1960年代初期のマルクス主義理論の2つのラインを乗り越えた。すなわち、経済主義あるいは技術的決定論のマルクス主義版、および空想的社会主義とヘーゲル回帰に導くところのヒューマニズムと歴史主義がそれである。しかし、フランスにおけるマルクス主義の論争と再生は、結局、その衰退に導いた。その例の一部は南ヨーロッパ中にみられた。すなわち、「解放以来の巨大な地位を誇ったパラダイムであるマルクス主義は、周辺の位置に転落した」(エリオット1987, p. 2)のである。

イギリスでの活性化はアルチュセールの仕事に刺激された。かれの仕事は、『ニューレフトレビュー』誌(1967年の41号, 1-2, 11-14頁にある、アルチュセールの「矛盾と重層的決定」についての編集者のコメントをみよ)の頁を通して好意的に紹介され、また、その著作『理論の貧困』(1978)でアルチュセールの反人間主義、反歴史主義、反経験論を系統的に攻撃し、彼の哲学を観念論として、彼の社会理論をブルジョア的として、彼の政治論をスターリニスト的として特徴づけたE・P・トンプソンにより大きな影響をもつ拒絶に出会った。P・アンダーソンは、『イギリス・マルクス主義内部の議論』(1980)で特別な概観や批判、トンプソンに対する応答を行なったが、この努力でアルチュセールを救出することはできなかった。イギリスにおけるマルクス主義の高揚は、アルチュセールと構造主義の衰退によるだけでなく、ラテンアメリカの理論家であるE・ラクラウによって主導されたイギリスとアメリカにおけるポスト・マルクス主義の潮流と、サッチャリズムとレーガン主義の影響による知識人の後退によって、修正されるべきものとなった。

マルクス主義の再定式化における新しい動向

「ポスト・マルクス主義」者

「ポスト・マルクス主義」という観念は、近年の多くの「ポスト」定式（例えば「ポスト・ブルジョアジー」「ポスト経済的」「ポスト唯物論的」「ポスト・モダン」そしてさらに「ポスト・社会主義」社会といったもの）の理論的文献のなかに現われている。それは、ブルジョア的秩序の矛盾、階級闘争、資本主義のジレンマから、新しく生じつつあるイデオロギーの影響をますます拡散し闘争を緩和するような合理的な秩序への転換を意味する。D・ベルはこの傾向を『イデオロギーの終焉』（1960）を唱えることで予示したが、かれの『ポスト・産業社会』（1976）というテーゼは、よりよき生活水準と、大衆教育、大量生産、そしていっそうの消費によって社会階級間のギャップを埋めることを描いたものであった（批判として、フランケル1987をみよ）。

これらの保守的でリベラルな見方に対するラディカルな批判は、幾人かの左翼理論家の、やはり資本主義を越える動きを思いとどまらせなかった。例えば、R・バーロ（1984）やA・ゴルツ（1980）の反資本主義的で空想的な社会主義は、いっそう平等主義的で民主的な世界の探求を表わしている。F・ブロック（1987）は、社会生活の制御における市民参加の再建に依拠した、より伝統的でないヒエラルキー、ポスト産業的な「非官僚制化」からなる国家を見る。S・ボウルズとH・ギンタス（1986）はポスト・リベラリズムの推奨においてラディカルで民主的な総合化をめざし、リベラリズムもマルクス主義も民主主義に優先権を与えてこなかったと主張している。かれらは、現存の社会秩序が民主主義を通していかに進化するかに焦点をあてる。かれらのポスト・リベラリズムは、革新的な、民主的に責任性のある経済的自由を確保する一方で、代議制民主主義と産業的自由の伝統的な形態をととして個人の権利の拡張を求める。かれらは、民主主義を、社会主義の理想がそれによって資本主義のもとで達成されるであろうメカニズムだとみなしている。かれらの政治哲学は、諸権利がいったん獲得されれば撤回できると考えないという意味において、立憲主義的（constitutionalist）である（これらの考えに対する批判的な論評はグッドウィン1990をみよ）。ベッカーら（1987）は、かれらのポスト帝国主義の概念化において、資本主義的な低開発の新帝国主義的および従属学派的説明を越えようと試みている。かれらは、支配的階級要員の国境をこえた合体、新しい国際的基盤のうえでの多様な国益の統合、決定論的な帝国主義の理解と従属学派的正統に代わるものとしてのトランス・ナショナル・ブルジョアジーの勃興を見る。最後に、E・ラクラウとC・ムフ（1985）は、ラディカル民主主義の企図にもとづく新しい政治を求めて、「ポスト・マルクス主義の領域」へ進む（これらの「ポスト」の諸形態についてのより十分な議論はチルコート1991を見よ）。

ラクラウとムフの意見はマルクス主義の問題では明快である。すなわち、「もはやマルクス主義によって仕上げられた主体性と階級概念だけでなく、資本主義的發展の歴史的コースのヴィジョンさえも維持することはできない」（1985, p. 4, 邦訳10頁）。これらの考えはとくに、ヨーロッパにおける左翼知識人の危機に関連している。一方で、かつてアルチュセールの仕事に支配的に表されたフランス構造主義の興隆と衰退がある。他方で、イギリスの経験は幾人かの知識人たちのあいだにおけるマルクス主義的立場の穏健化と、いくつかの基礎的な社会主義的立場からの後退に表れている。R・ミリバンド（1985）はかれらを「新修正主義者」とよび、E・M・ウッド（1986）はかれらを「新しい真の社会主義者」と名づける。これらの知識人たちは多くの点で異なっているけれども、かれらは、資本主義諸国における労働者階級がその革命的期待を実現することに失敗し、闘争のモデルはいまやさまざまな地位、集団、そして社会運動から生じる多数の利害を具体化すべきであるということから、階級の優越性は退けられるべきだということに同意しているようにみえる。これらの考えは第三世界、とくにアルゼンチンとチリにおいて顕著であるが、ポスト・マルクス主義と社会主義的革新が理論的課題になっているラテン・アメリカに広がった。

ポスト・マルクス主義的思考の起源は、1970年代と80年代のユーロ・コミュニストとユーロ社会主義の発展においてみられるだろう。スペインのマルクス主義者であるF・クラウディンは、国際労働運動が資本主義の危機を社会主義的転換に移行させることに失敗した1970年代半ばの時期に、南ヨーロッパにおける過剰生産の経済的危機、不況、民主的転換について書いている。その時、フランスとイタリアの共産党は、社会主義が民主主義のより高い段階をなすであろうと同時に、中小農民と工業生産者は社会主義の建設に参加することができるだろうということに同意した。すなわち、かれらは、国家の民主化がますます地方・地域自治体や、政党の多元性、労働組合の自由と自律性のための役割を提供すべきであると信じた(クラウディン 1978, p. 65-66)。スペイン共産党の指導者S・カリリョは、「それによって社会主義社会の建設に適応するような、資本主義的国家装置の民主化」の必要性に言及する(1978, p. 13)。

同時に、かれによれば、ユーロ・コミュニズムという言葉の科学的価値は疑わしく、それはコミュニストによって提起されたのではなく、いかに実践がつねに理論に先行するかの一例であり、理論が実践の普遍化であることを気づかせる。亡命により多年パリに住んだギリシャのマルクス主義者、N・ブーランツァスは、スペイン、ポルトガル、ギリシャにおける独裁制の危機と凋落により可能となった民主主義の開始の比較研究(1976)において、階級分析を国家の構造理論に適用した。とくに、1974年から1975年にかけてのポルトガルにおける革命的時期は、かれに、国家装置の外で革命的権力基盤を打ち建てた労働者と民衆の力(forces)が国家権力に対決したということをもって二重権力を強調したレーニン主義的立場を放棄させるように影響した。代わりに、これらの力が中心的な国家装置への浸透と占拠を通じて無血革命の可能性に転化するだろうというのである。ジェソップ(1985)は、この展望(ブーランツァスの最後の仕事1978a, bにおいて明らかなもの)が1980年代初期における幾人かの左翼知識人たちに構造主義的説明を越えて進み、ポスト・マルクス主義の領域において理論を発展させるように刺激したと信じている。最後に、C・ラフォート(1986)の仕事がポスト・マルクス主義に貢献した。かれは、科学性に対するマルクス主義の要求を拒否し、社会における不確実性を強調し、反対闘争の渦中における知識人にたいして強い興味を示した。

ラク라우とムフは、E・M・ウッド(1986, p. 3-4)が階級分析と社会主義プロジェクトの零落からの撤退として特徴づけたものにおいてマルクス主義的分析を越えて進もうと試みる。かれらは、労働者階級が革命的運動に進まなかったと論じる。それによれば、経済的な階級利害はイデオロギーや政治から相対的に自律的であり、労働者階級は社会主義のなかに何の基盤ももたず、社会主義的運動は階級を離れて進み、政治的力は「民衆の」政治的、イデオロギーの要素の外で、階級的結びつきとは独立に形成される、また、社会主義の目的は階級利害を越えるものであり、社会主義のための闘争は不平等と抑圧に対する複数の抵抗より成る。

ラク라우とムフのポスト・マルクス主義は、1970年代半ば以降、社会主義政党が力をもった諸国(とくにフランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ギリシャ)における社会民主主義と民主的社会主義の政治的言説に対応する知的思考の表れである。この言説は、社会主義への転換、ばらばらの多党状況において政治的多数派を確実にするための左翼中心の政治的勢力のブロックの必要性、人民階級(労働者と農民)の要求を和らげるための人民的改革、現在の資本主義の段階における生産力を促進し発展させる度量といったものに焦点をあててきた。政治の主流の現実性と圧力は革命的レトリックをあいまいにする傾向があり、そのため階級闘争や労働者階級、プロレタリアートのディクタトゥーラといった用語やマルクス主義自体でさえも左翼の対話から脱落させられる。ムフは、新しい社会運動の興隆がマルクス主義の階級還元主義に挑戦してきたと主張する。「マルクス主義はそれがこうむった打撃から回復することはありそうにない」(ムフ、ロス編1988, p. 31)。ロスは、西欧知識人のあいだで全体主義と普遍的な前提が広く放棄されるのを見て、次のようにのべる。「オーソドックスなマルクス主義の伝統は、…普遍性の言説に等しい。その言説は、特定の社会階級、とくに革命のプロレタリアートの社会的機能の普遍性の分析にもとづき、これにより維持されてきたのである。」(ロス1988, p. xiii)。

批判者はこうした見方に同意しない。マルクス主義と文化についてのエッセイを編集したもの(ネルソン

とグロスバーク(1988)に対する批評(1989)において、ハートレイは、ラクラウが政治に対する生きたマルクス主義的アプローチを構成する基礎を提供し、マルクス主義の再接合に導くような、思考と政治的实践を統括する問題についての本質的な議論を見ていると信じる。イサークは、ラクラウとムフの議論が「非階級関係と闘争のぎりぎりの重要性を認識することができるポスト・マルクス主義の立場を接合するもっともねばり強く、自己批判的な試みを表している」と主張するが、しかしかれは2つの根拠にもとづきかれらを批判する。第1に、社会生活における因果関係の本質をあいまいにしていることであり、社会生活においてかれらは「2つの両極の可能性——一種のマルクス主義的行動主義もしくは科学的な因果関係の分析の放棄——を描いているにすぎない」、第2に、「権力の統括理論をかれらが拒否することで力について明確さを欠くこと」である(1987, p. 214-216)。ジラスは、ラクラウとムフとの討論に対する返答において、かれらが不合理に固定したアンチテーゼによってマルクス主義を批判している、そのアンチテーゼはマルクス主義理論家の重要なアイデアをねじまげ、革新的あるいは反動的といったある政治的指向性に適合しうる「概念的にうすっぺらい」理論を提供し、「反啓蒙主義」にむかう傾向をもつ「膨張したレトリック」を使用し、反マルクス主義に包まれた民主主義についての皮相なアイデアに訴えている、と論じる(1988, p. 35)。

社会主義者の見方から階級を削ることの根本的な対立——そして新思考をマルクス主義から区別するもの——は、資本を生産する階級であるという構造的立場のために労働者階級が革命的潜在能力において重要である、という伝統的な見方である。ポスト・マルクス主義者は生産様式としての資本主義の蓄積と再生産にとって中心となる資本と労働とのあいだの搾取関係の分析を避けている。さらに、経済から自律したものとしての政治とイデオロギーの強調は、古典的かつ現代のマルクス主義者が関心のあった政治経済学への注意を掘り崩す。資本主義的生産様式の本質についての論議はもはや重要でないようにみえる。その結果、階級と階級闘争は政治的多元主義、政治的組織、利害集団の強調によって置き換えられる。資本と労働のあいだの対立を見落とす一方で、国家の分析は権力ブロックと民衆との間の違いを強調するだろう。したがって、そこには1つまたはいくつかの政治的諸制度に焦点をあてる傾向があるようだ。すなわち、政治勢力の分割は社会に関する概観の展望を制約するだろう。主流に入り込もうと試みる政治的運動は孤立させられるだろう。すなわち、支配者層に挑戦しようとするポピュリストの戦略は、特殊利害の分断によって拡散され弱められるであろう。

「分析的マルクス主義者」

近年、「マルクス主義的」言説において新しい傾向が生じてきた。この傾向は、自分たちを「分析的マルクス主義者」と呼んでいる知識人たちによってすすめられてきた。かれらはまた、「9月グループ」「合理的選択マルクス主義者」あるいは「主体的マルクス主義者」などの名前で特徴づけられてきた。J・ローエマ、J・エルスター、G・A・コーエン、E・O・ライトといった知識人たちがこのグループを構成している(ローエマ1986を参照)。その他にはA・プルツェヴォルスキ、P・バーダンが含まれており、未完成の若い知識人たちの数も増加している。

この「新しいマルクス主義」は特異なマルクス主義である。それは、レーニンとスターリンからアルチュセールにいたるマルクス主義の固い公式を超越しようとする決意においてはポスト・マルクス主義と同じであるが、合理的選択を強調しそれに固執することにおいて他のマルクス主義とは異なる。その入り口や前提は一般に社会科学への実証主義的アプローチを反映している。とくに、新古典派経済学との親近性は驚くべきものである。新古典派経済学と同じく、その思考法は選好と合理的意志決定をめぐって組織されている。その理論は行動上の仮定もしくは個人的意志決定の公理から成る。それはその源流を、マルクスにおけると同様に、J・ヒックスとK・アロウの主観的経済学にみいだす。

この分析的マルクス主義の前提と基礎はエルスターとローエマの仕事のなかにみいだされる。エルスター(1985)は個人の意志決定に焦点をあて、ローエマ(1982)は資産の不公平な賦与(endowment)を強調する。

より一般的に言えば、分析的マルクス主義は、①合理的意志決定、②資産の不平等な賦与、③集合的行為の諸問題、そして④歴史の理論、という4大領域に焦点をあてる。われわれは以下、その順序で議論しよう。

第1に、分析的マルクス主義が依拠している思考体系は、目的の達成における個人的選択の効用である。諸個人は合理的(利己心的な)選択を行なうといわれる。とくにエルスターは個人的行為に没入する。かれは『マルクスを理解する』(1985)を含む多くの本の著者であるが、すべての人びとがかれらの選好を達成するために合理的に行動するという原理を支持する。方法論的個人主義と名づけられるこのアプローチは、社会現象のすべての説明は諸個人の行為に還元できるという。エルスターは、この説明の形式は機能的説明よりも優れているとして、この点でコーエン(1978)の機能主義に異議を唱える。たとえば、ロエーマ、ライト、バーダンの場合がそうであるように、諸階級の行為は諸個人の行為に還元される。たしかに、エルスターは方法論的個人主義が社会研究を開始するための最善の前提であることを示すことに夢中なので、『マルクスを理解する』において、マルクス自身が合理的選択理論の発見者であったことを示そうと試みる。エルスターの合理的選択の解釈は、選好の形成に入りこむ構造的要因の強調を欠いているために硬直的である。ブルツェヴォルスキ(1985)、ロエーマ(1982, 1988)、ライト(1985, 88, 89)はエルスターとは異なる。かれらは、個人の意志決定のパラメータに影響する構造的に決定される位置をもっと強調する。コーエンの歴史理論(1978)は生産力を強調するため、理論の中心部分は機能的である。ブルツェヴォルスキは、社会民主主義の失敗に関する分析において、発展の構造的に決定される現象として選択の欠如を強調する。コーエンとブルツェヴォルスキは、個人の意志決定よりも構造的制約にもっと焦点をあてるので、この新しいパラダイムに立つのはむづかしい。かれらは、その分析において個人の意志決定を組み入れるけれども、それはほとんど事後的であるようにみえる。コーエンとブルツェヴォルスキの命題においては、選択は存在はするけれども、個人の選択の範囲の外側にある制限によって構造的に決定される。

第2に、分析的マルクス主義は資産の不平等な配分に焦点をあてる(とくにロエーマ1982, ライト1985をみよ)。ロエーマは譲渡されえない人的資産と、特権的地位と私有財産を含む譲渡可能な資産を引き合いに出す。ライトはスキルや支配的地位を含むように資産を定義する。資産の不平等な所有は搾取の基礎とみなされる。ロエーマは、もし資産の配分が公正であれば搾取は非常に異なった性格をもつ、すなわち、行為者は資産を欠くことによって服従を強いられまいだろうと論じる。バーダン(1983)はまた、ロエーマの資産概念を使って、低開発諸国において搾取がどのように存在するかを示す。

集合行為問題は分析的マルクス主義における第3の強調点をなしている。エルスター(1985)は、新古典派経済学においてしばしば議論されるフリーライダー問題と集合行為問題を繰り返し論じている。ブルツェヴォルスキもまた団結の問題を強調するが、それは哲学的な命題というよりは経験的な現実にもっと焦点をあてたものである。ロエーマ、バーダン、ライトはみな、かれら自身の階級論を展開する。ライトが12の階級の地位を描くのに対し、ロエーマとバーダンは5つの階級の地位を概念化する。個人の意志決定のパラダイムについてはエルスターとロエーマのリードに従いながら、ライトはかれの著作『階級論』(1985)において、その初期の階級(相争う階級配置)の構造理論(1978および1984)からもっと主観的な階級分析の領域へと移っている。この方法論上の移行は、諸階級の問題をそれ自体として論じるという新しい方向にライトの分析を完全に向ける。こうして、階級問題に固執するというにもかかわらず、分析はもはや、集合行為の問題に注がれるほどには階級に向けられない。中心の焦点は、もはや労働過程から生じるような階級ではなく、政治的権力グループの表明と諸階級が行使する権力におかれる。こうした階級の新しい概念化はオーソドックスな階級概念とはかなり異なる。

最後に、分析的マルクス主義は歴史の唯物論的概念を強調する。この強調は合理的選択の枠組が固執する多くの経験論的原則を破壊するものである。それは明らかに、支持しようとしている厳密さの基準と矛盾する。歴史の唯物論的概念の強調は分析の残りの枠組の外にあり、われわれが新構造主義とよぶものによりいっそう適合する。新構造主義に対する合理的選択マルクス主義の関わりについては後にとりあげよう。

分析的あるいは合理的選択マルクス主義は、カーリング（1988）、メイヤー（1989）、ウッド（1989）、ライト（1989）が明らかにしているように、1つの強力な増大しつつある潮流である。それは、かれらの専門分野においては評価が高く、学問世界に支えられている。ロエーマとバーダンは経済学、ライトは社会学、ブルツェヴォルスキは政治学、エルスターは哲学、コーエンは歴史学というように。かれらはみな、評価の高いアカデミックな証明書を持ち、有名な大学の出身者である。確かに、かれらはみなその学問の「最先端（cutting edge）」にいとみなされている。そのような確立された評判が近年生じている合理的選択パラダイムを魅力あるものにすだろうことは疑いない。

この形態のマルクス主義は、いくつかの理由で学問世界に訴えるものがある。新古典派経済学との親近性と実証主義的理論は、より構造主義的なマルクス主義の見方では不可能と思われる主流派社会科学との相互作用と討論を可能にしている。さらに、統計的示唆と数学的定式の強調は、実証主義的社会科学によって正統化され魅力あるものとみなされる。エルスターは、社会理論における進歩にマルクス主義者たちが適合すべきだと主張する。確かに、数学的で統計的な言葉で仕事することは、議論を要求する雰囲気と正統性を与える。合理的選択マルクス主義はアカデミックな立身出世主義にうまく適合するだろう。実証主義的理論家たちと仕事することを強えられる若い左翼の学者たちは、合理的選択パラダイムに隠れ家をみいさすことができるだろう。

マルクス主義的原理へのいわゆる執着にもかかわらず、この合理的選択パラダイムから生じる文献はドグマティックで、搾取と階級についての伝統的なあるいは構造的マルクス主義の概念には受け入れがたいものであった。エルスターは、マルクス主義内部におけるよりヘーゲル主義的な伝統に関して、それが「怠惰な摩擦のない思考を助長する」と言明している（カリニコス1989, p. 48）。ブルツェヴォルスキは、合理的選択の枠組の仮定の多くは「支持できない」、そして、「個人的行為の理論はもっと状況に関する（contextual）情報を含まねばならない」と論じる（1985b, p. 381）。レヴァイン、ソーバー、ライトは、マルクス主義はすぐれた科学的方法論であるにちがいないが、「方法論的个人主義はすぐれた科学的方法論ではない」と信じている（1987, p. 68）。確かに、分析的マルクス主義者は、マルクス主義的認識論を新しい方向に向けるために大きな伝導目標を持ち、古い仮定や前提を放棄し、マルクス主義を主観的社会分析の領域に転換するように見える。この目標は、エルスターとロエーマの仕事においてはきわめて明白である。エルスター（1985）は「現代」社会科学の技術を適用することを語る。論理的にそれに続くのは方法論における変化である。個人の選好の形成というエルスターの関心は、「現代」実証主義理論にうまく合致する。次に、J・ロエーマ（1988, p. 47）が労働価値論の観念をすべて完全に放棄することを語る。そうした放棄は、唯物論的伝統のなかに存在してきた社会改革のための中心的で注目すべき議論を制限することになる。より伝統的なマルクス主義（それは意味あるもの *sensical* にできないとして）かれらのパラダイムの範囲に入らないという理由で、あるドグマティズムが生じていると結論することができるだろう。

しかし、マルクス主義を転換するというかれらの宣教師の熱意でもって、かれらはマルクス主義のいくつかのキーワードに適合し、その意味を転換した。このことが、かれらがあたかもマルクス主義のなかで仕事をし、それとともに諸問題に取り組んでいるかのようにみえることを可能にしていることは疑いない。マルクス主義と緊密に結びついてきた搾取と階級という2つの用語は、分析的マルクス主義のもとではねじれた意味をもつにいたった。搾取はもはや労働日の一部の抽出としてではなく、不平等な資産関係の表出とみなされる。同じく、分析的マルクス主義のもとでは、階級はもはや人々の集団が労働過程によって区別されたものになる過程を特徴づけるのではなく、集合的単位への人々の集団の展開に焦点をあてるものである。マルクス主義の用語に与えられたこれらの新しい意味は、積極的に異なる思考体系を示唆する。われわれが上に示唆したように、いわゆる階級問題への忠実さは別として、思考体系はきわめて新古典派経済学とリベラル社会科学に近い。ロエーマ（1986, p. 199）はこの点を認めている。「最近の分析的マルクス主義と最近の左翼のリベラルな政治哲学とのあいだに引かれた線はファジイである」。そうした区別の欠如は、もし最近の

リベラルな社会科学がより構造主義的なマルクス主義に優ると考えるならば、重要なことではないだろう。この思考体系は、それが持っている主張する説明力の不足に陥るように思われる。

確かに、そのような原子論的な推論はリベラルな理論家によって使用されており、分析的マルクス主義者はある制限された説明能力をもっている(レボヴィッツ1988をみよ)。これらの知識人たちによって支持されている思考体系は、諸個人の合理的な行動に焦点をあてる。原子的個人は全体に優先すると考えられる。合理的選択理論の礎石として使用される仮定上の個人は外部の影響から自由である。したがって、この個人が直面するすべての決定は「合理的に」行われる。より一般的に言えば、この合理的選択理論は人間性に関して思弁的もしくは主観的な仮定のうえに建てられている。それは、人々が与えられた条件のもとで行動することを著者たちがいかに期待するかということに関わっている。確かに著者たちは人間の特質に関してある考えを心に抱いている。全体の議論がよってたつ基礎的な仮定をなすこれらの特質は完全に探求されずに残されている。議論が本当にもとづいている基礎は人間の心の心理学である。確かに、合理的選択マルクス主義の科学的な主張のすべてにもかかわらず、それが解決しようと試みている課題の決定的な解決のための真の基礎をしっかりと置いていない。(いっそうの評価のために、ローマの搾取の使用の批判としてパートラム1988、キーヴ1988、スミス1989、「数学のフェティシズム」への攻撃としてルッショ1988、「生産における関係、階級の生きた経験をまったく避けている」ブルツェヴォルスキの分析の限界性についてはジュラボイ1989, p. 85を見よ。E・M・ウッドは、ポスト・マルクス主義とひとつになっているとみられる分析的マルクス主義のもっとも包括的で徹底的な批判を提供する。彼女によればこの2つのアプローチは「マルクス主義理論における「厳密さ」を確立する努力として始まったものだが、…多くの者にとって理論と実践におけるマルクス主義の一般的な拒絶において終わったのである。」[1989, p. 87])

新構造主義的マルクス主義者: 構造主義の限界を超えて

方法論的个人主義と結びついた人間性に関する諸前提は、一般に、より「構造主義的な」マルクス主義によって拒否される。構造主義は諸個人の行動を公理的にシステム化するよりも、諸個人に影響する環境に焦点をあてる傾向をもってきた。人々は「合理的」で、あらかじめ方向づけられているよりもむしろ、かれらの社会的環境の所産とみなされる。一般的には、「システム」によって課せられた構造が人間存在の積極的で創造的な衝動を抑えると論じられる。構造主義は個人を超越し、システムの関係の構造を評価するよう試みる1つの分析方法である。構造主義的方法是現存する社会関係が不足と危険性により日常生活を圧倒するので、諸個人が全体の外側にあるとはみなせないことを強調する。個人が直面する多数の影響と構造は、その個人がいかに行動し意志決定するかに影響する。合理的選択の強調に対して、構造主義者は個人の行動を個人が向いあう環境の産物とみるのである。

構造主義的方法是其主要な研究対象として「システム」をとらえる。それは、事実と行動は孤立的に考えられないと論じる。諸関係とその出現および持続は構造主義的方法の中心的な強調点である。確かに、われわれが「新構造主義的マルクス主義」とみなすものは、その入り口として階級と生産を使ってきた。

マルクスからアルチュセール、フーコー、ラカン(ディジョルジ1972をみよ)まで、構造主義の長い伝統がある。グラムシは、かれより以前のマルクスとヘーゲルのように国家と市民社会とを区別したし、かれによるヘゲモニーの強調と他の分析カテゴリーは、支配階級が労働者階級を支配し搾取することを可能にする国家の諸装置(抑圧的、イデオロギーなどの)を確認したアルチュセール(1971)の構造主義的立場に影響を与えた。これにたいし、プーランツァスは、国家の行為は国家権力の位置にある諸人格によるよりも、社会の構造によって決定されると信じた(1973)。ゴドリエは土台と上部構造の考えや、資本主義的システムの「可視的活動」の背後に隠された「内的構造」に関連させて、フランスの人類学者C・レヴィ=ストロースにおける構造主義をマルクス主義に関連させた(1973, p. 336)。また、構造主義の考え方はS・アミン(とくに1976)その他に代表される低開発と従属性に関する、今や流行遅れの第三世界の文献に広がった。I・ウォーラステイン(1975)は中心、半周縁、周縁という構造的枠組のなかでの初期資本主義の起源と進化を説明

した。これにたいし、P・レイ（1973）、ヒンデスとハースト（1975、1977）は、生産様式アプローチのなかで刺激的な分析を成し遂げた。後者についてはフォスター＝カーター（1978）、ルッシオ、サイモン（1986）による評論がある。

幾人かのマルクス主義的研究者は、構造主義のこの理論的遺産で分類されることを好まない。にもかかわらず、構造主義の言説と理論的カテゴリー（例えば、社会形成、生産様式、重層的決定といったものをあげる）は、現代マルクス主義の文献に普及している。新構造主義的マルクス主義はさまざまなそしてしばしば矛盾する理論を包含している。ポスト・マルクス主義や分析的マルクス主義のように固い理論的定式化や還元主義、非妥協的な政策などの制限を突破しようと努力するが、他の潮流と異なり明示的に構造的な枠組を含む。現代構造主義者のあいだで集中している2つの大きな領域に注意を向け、この強調点をみよう。それは、歴史の古典的な定式化への批判と、階級問題およびそれに関わるディレンマである。

マルクス主義者には、社会がそれぞれ特有な構造的特徴をもつ連続した段階をととして進化するとみる傾向があった。西欧における資本主義の出現は史的唯物論の伝統のなかで1世紀を優に越える議論の源泉であった。しかし、歴史に関するマルクス理論の意味は近年におけるより多くの論争の源泉であった。アルチュセールのような初期の構造主義者は、マルクスの歴史理論をマルクスの普遍的な理論的哲学的企図の一面とみなした。マルクス歴史理論に関する多くの最近の再構成は、こうした方法論的傾向への反動とみなしうる。G・A・コーエン（1978）とW・H・ショー（1978）はとくに、アルチュセールの哲学的方法論的コンテキストからマルクスの歴史理論を引っ張りだし、歴史の技術決定論的解釈を守ろうと試みている。

コーエンはマルクス歴史理論の再定式化における現代の指導的な著者である。かれは生産力と生産関係のあいだの区別に焦点を当てることによって、機能主義的見方から史的唯物論を論じる。かれは生産力を主要には技術的に有効な知識とスキルであるとみなす。（生産）関係は生産力を効果的に支えるこれらの制度を構成する。かれは（生産）力の優位性を議論することにより、概念上の整序さを展開する。コーエンの業績の中核は、明確な軌道にそって社会変化を生み出す内生的なダイナミクスが存在することを証明することである。（ショーの議論はコーエンと緊密に並行しており、議論する必要はない）

現存する生産力によって生産関係を機能的に説明するという意味において、コーエンとショーによって代表される思考の線は問題がある。このやり方で歴史を説明することによって、他の構造主義者が意味あるものとみなす社会的および政治的地層をとり除く。構造主義の有力な認識論に挑戦し、他の構造主義者が意味あるものとみなす諸問題をのべるという意味において、コーエンとショーは新構造主義への挑戦を示す。

I・ガースタインは総体性に焦点をあて、全体主義的社会理論に関わってアルチュセールへの負債を認める。かれは生産様式についての共通の誤認を分析し、アルチュセールの仕事と他の構造主義者における生産様式、経済構造および社会形成の用語の関係を徹底的に調べる。かれは、いくつかの構造的諸関係が生産様式概念化にとって必要であると論じる。かれはまさに、「われわれは他の諸理論（政治やイデオロギー、日常生活の理論）を包含するためにマルクス主義理論を切り開く必要があるので、構造理論をも行為を含みうるものにするように開かなければならず、・・・ある種の構造理論は・・・そのうちで個人の行為が生じる制約を理論化するべく求められている・・・しかし、いずれにしても構造理論は、方法論的個人主義を支持することで簡単に排除されることはできない」（1989, p. 132）。

階級はまた、新構造主義者の中心的な旋回点である。階級の問題で出されている文献は階級の構造的な特性、それらの形成、それらの闘争のダイナミクスに焦点をあてている。われわれは、最近の20年の議論の複雑さに深く立ち入るよりは、ライト、ウォルフとレズニック、イサクそしてビュラヴォイによって進められた理論を簡潔に検討する。

E・O・ライト（1978）の階級に関する最初の仕事は、階級に関するプーランツァス（1973）の構造主義的な概念化の欠点に対する反動として生まれた。ライトは、プーランツァスの3階級（プロレタリアート、プチ・ブル、ブルジョアジー）が現代資本主義国における真の階級関係を十分に捉えていないと考えた。ライト

は、人々は「階級関係のなかで主観的には矛盾する位置を占める」と論じる。これらは根本的な矛盾する階級関係に引き裂かれている位置を表す。ライトは3つの矛盾する階級配置すなわち小雇用者、半自律的賃金稼得者、経営者と管理者を確認する。このような階級の概念化において、ライトは、資本主義が発展したために階級関係は劇的に変化し、それと同時に研究されるべき方法は変化しなければならない、と主張する。

その『階級論』(1985)において、ライトは、資産関係にもとづいたロエーマの搾取理論から打ち建てられた、まったく新しい階級の概念化を示している。ライトは3つの資産形態すなわち生産手段における資産、スキルおよび証明書資産、組織資産をみることによって12の階級配置の類型を示す。このコンテキストのなかで、ライトは、中間階級の諸階層のあいだに存在する関係をよりよく理解できると主張している。

ライトが階級区分をさらに行うことで階級問題に対応するのに対して、ウォルフとレズニックは階級の意味のあいまいさを見、階級は静態的な存在物としてではなく、人々が入り込む過程と見るべきであると論じる(1986)。ウォルフとレズニックは、階級過程を「基礎的な階級過程」と「包括的な階級過程」と呼ぶところの2つの異なる部面に分ける。基礎的な階級過程においては、剰余が労働者階級によって生産され資本家によって取得される。包括的な階級過程においては、基礎的過程において所得された剰余が分配される。かれらは、マルクス主義はそれ自身の固有の認識論(かれらが重層的決定と呼ぶもの)をもっており、そこではすべての分析が非還元主義的で反本質主義的である。

ウォルフとレズニックは、アルチュセールと同じように重層的決定の概念に執着する。重層的決定の言葉に体化された観念は、どのような社会現象もその現象を完全に説明する1つの単純な決定因をもっていないというものである。すべてのものはその他すべてのものの所産である。認識論的に一貫した位置がマルクス主義にとって肝心であると考え(ウォルフやレズニックのような)人々は、ライトとプーランツァスの方法的な前提にたったかれらの階級分析を拒絶する。ウォルフとレズニックは、個人は多くの行動に従っていると論じ、階級だけで定義すべきではないし、またそうすることもできない多くの異なるアイデンティティを想定する。かれらはまた、種々の過程は1つまたは他の過程に還元できない、すなわち、ある人格は1つの過程に従事している、あるいは1つの特徴を示すという理由で、過程を単純に階級に還元することはできないと論じる。例えば、プーランツァスは階級関係はイデオロギー的、政治的水準において存在すると論じている。階級の純粋に経済的概念をこえることにより、強調点は社会変化の中心的決定因としての人格相互の関係とその支配におかれる。ウォルフとレズニックはこうした認識論を拒否し、階級過程は文化的、政治的、ジェンダー的過程とはまったく区別されるという。かれらによれば、階級の剰余労働理論は、人間が「かれらが直接に参加する無数の社会過程」(1987, p. 159)によって定義されうだけであるということを受け入れる。この概念化はある個人を社会における1つの階級あるいは位置に還元するのではない。確かに、それは、諸個人が特有な、個人的に特殊なやり方で行為し行動する人間であることを認める。かれらは、個人を階級に還元することは個人に影響する多くの社会的過程を1つの過程に還元することであると論じる。階級の剰余労働理論(ウォルフとレズニックが支持するもの)は、個人を所与の社会階級に還元することを拒否し、諸階級の全体性を個人であると認めることも拒否する。

J・イサークはまた、構造主義的強調点をさらにおし進め、階級と国家と権力との関係に関する現実主義的なマルクス主義理論を支持する議論を行い、マルクス主義を除くどのような知的伝統もそうした豊富な分析を提供していないことを確認する。マルクス主義的階級分析は、経済的地位に焦点をあてた構造主義的な理解を与える。しかし、政治的、イデオロギー的現象を経済において決定される階級利害に還元するか、それとも「政治的、イデオロギー的現象の自律性」(1978, p. 96)を認めるか、選択はそのあいだにあるとするヒンデスの主張のように、「マルクス主義的な階級権力の分析は・・・すべての権力を生産関係のレベルに還元するものではない」(1987, p. 116)。イサークは、新しい社会運動(フェミニスト、公民権、平和、エコロジー)は階級対立ではないが、しかし権力の非階級的關係に関連するところの対立の表明であるとみる。かれの信ずるところによれば、マルクス主義はこれらの対立を「階級関係の剥脱に変えてしまわずに」(1987, p.

209)説明しなければならない。かれは、「批判的マルクス主義理論は民主主義を幻想とみなすべきではなく、理論的、実践的多元主義にもとづかねばならない」(p. 229)と考えるのである。

M・ビュラヴォイは労働者の分析を回復することと呼びかける。参与観察にもとづく研究において、かれは、産業労働者階級が歴史における重要な介入をしてきたし、これらの介入は生産過程によって形成され続けるだろうと主張する。かれは「新左翼」に対する反論において、マルクス主義における2つの中心的な命題、すなわち「労働者階級の優位性と生産の優位性」(1985, p. 5)を守る必要性を主張している。かれは、経済決定論を批判する一方で、「生産過程が労働者階級の闘争の展開を決定的に形成する」(p. 7)というテーゼを擁護する。現代社会の発展と再生産の分析において階級概念は重要であり、「階級支配の形態がジェンダーと階級【——人種の誤植?】によって形づくられるよりも、人種とジェンダーの支配はそれらが埋め込まれている階級によって形成される」。こうして、「支配の非階級的形態を除去するどのような試みも、階級社会と考えられる資本主義と国家社会主義の内部における変革の制限と特徴を認めなければならない」(p. 9)。

付け加えると、ジェンダーや人種のような他の支配形態は、階級との関連で話されてきた。マルクス主義フェミニストは、かれらが「二重システム理論」(ハートマン1981)と名づけるものにおける階級関係と家父長制関係の相互作用を理解しようと試みてきた。さらにいえば、人種と階級の関係について多くの理論化がなされてきた(マラブル1983)。マルクス主義的階級分析をととして、現代の社会問題を理解するためのこれらのすべての試みを、われわれは新構造主義と結びつけてきた。ポスト・マルクス主義や合理的選択マルクス主義の一般的指向とは異なり、新構造主義者は階級分析によって現代の問題を理解しようと試みる。構造主義者は、かれらの現代社会理論を個人やイデオロギーの抽象的観念から始めるのではなく、階級に基礎を置く構造のシステムであると認めるものからうち建てるのである。

展 望

われわれの論稿は、マルクス主義の現在の危機を、マルクスとその支持者の思考における多くのマルクス主義【複数】と結びつけてきた。例えば、ロシア革命の勝利はマルクス主義理論における多くの革新を刺激したが、スターリニズムの勃興はマルクスのより成熟した著作を前提とする、教条的で頑固なマルクス主義のヘゲモニーに導いた。ところが、他のところでは、個人の選択と人間的次元の強調とマルクスのいくつか初期の著作への注目とともに、議会の実践による社会主義の実験が現われた。

われわれはこの危機の解決を探るにあたって、2つの歴史的契機を検討した。第1に、1960年代と1970年代に、アルチュセールは、構造的枠組にとどまりながらではあったが、マルクスの成熟した思考に注意を向け、スターリニズムをいかに越えるべきかを証明することによってマルクス主義を生き返らせた。かれの影響は重要であったが、資本主義と社会主義の理論と実践の両方における急激な変化は幻滅を引き起こし、アルチュセールの衰退に導いた。第2に、1980年代にいくつかのオルタナティブな潮流がアルチュセリアンの伝統の内部で、あるいはまたそれに反対して生じた。この時期はまた「新しい」民主主義、「新しい」社会主義、「新しい」マルクス主義への模索といっしょに、オーソドックスなそしてスターリン主義的なマルクス主義の古い硬直的な実践からの撤退を表す。オルタナティブな諸傾向は、実証主義的社会科学の量的方法に適合する分析的マルクス主義と、過去の決定論的で還元主義的公式の欠陥を正そうと試みる新構造主義的マルクス主義を含んでいた。同時にポスト・マルクス主義は、かれらのよりよき社会への転換の追求がつねに代議制民主主義と多元主義的社会主義を伴うとしても、マルクス主義と一緒に非難した。

われわれは、これら3つのオルタナティブな思考様式が1990年代に十分影響力をもつだろうと主張してきた。これらのうちの1つの潮流がマルクス主義の危機を解決するということは疑わしいが、それぞれが異な

るやり方で、1990年代の主要な課題であると期待される民主主義と社会主義、変革に対する発展的で革命的な接近、社会主義的転換などのよりいっそうの理解に寄与するだろうと楽観的に考えるものである。

第1に、民主主義と社会主義のための闘争は、社会主義の可能性の幻想を示す代わりに、リベラルな実践を利用する独裁制からの民主的解放への進展という重要問題、すなわち、労働運動の前衛やプロレタリア政党とともにあるいはそれなしに人民階級が参加すること、社会主義への運動を妨害する資本主義的経済利害の決定的な役割に立ち向うべきである。また、議会制の過程の役割、幅広い参加民主主義のための民衆の運動と展望の基礎を崩すかもしれない政党の支配などが課題になるだろう。

第2に、社会主義にむけた運動はまた、発展的もしくは革命的な戦略の行使と、革命の実行における労働者階級の役割の主張とのパラドックスに立ち向うべきである。生産し搾取される階級として、労働者階級は資本主義においてその客観的利害を擁護するような場所をもつ。国家の外側で国家装置を攻撃するために組織するのか、あるいは統治システムのなかで活動することによってリベラルな国家を改革するために活動を強化したり民主的に強めるかというような二重権力の可能性が問題となるだろう。

最後に、発展的あるいは革命的コースに関係なく、社会主義への道は困難であろう。進んだ社会のもとでの急激な変化が資本主義の進化と強固さを表すのに対し、社会主義をつくりあげる過程は増大傾向にあるが、世界のより貧しい部分においては生産力の水準が低く、越えがたい問題が社会主義と民主主義への過程を抑えるようにみえる。社会主義的転換の達成は、政治部面における間接的な代議制の民主主義形態と経済における資本主義的生産力の発展を含む、中間の段階を必要とするだろう。たぶん、幾人かの知識人は、資本主義の持続性とその普遍的な影響力のために社会主義を注入する困難を認める手段として、ポスト・マルクス主義と分析的マルクス主義によってこの現実を隠してきたのである。ウッドは、これらの傾向がともに「歴史の錨(いかり)から分離された政治にむかって駆り立てられており・・・そこではレトリックと言説が社会変化の力(agency)であり・・・変化のすべてのラディカルなプログラムは失敗の運命にある」(1989, p. 88)ことを強調する。したがって、多くの左翼知識人たちが社会の構造主義的説明を採用することに対して消極的なことは、決定論的で還元主義的アプローチ分析を避け、労働者階級を越えて他の社会運動(フェミニスト、エコロジスト、平和主義者の)にまで広がる、広義の多元主義を支持する努力に関連している。望ましいアプローチは、労働者階級と同様に、これらの社会運動にも責任をもつであろう。

マルクス、エンゲルスの時代から今の時期までのマルクス主義理論は、革命運動と、正統から開放された種々の定式化にシフトする思考の継続的サイクルとの相互作用の点から理解されるだろう。最近のサイクルは1960年代後半の大衆運動のうねりから生じ、大衆闘争と改良主義指向と政治の主流からのマルクス主義の分離へと続いた。楽観主義の意味において、ズィマンスキは、正統が支配するときには批判的な理論的考えも現われるが、改良主義が支配するときにはマルクス主義は想像力と洞察力に乏しくなる傾向があると論じている。「したがって、開かれた改良主義的マルクス主義の最近の優位は、長引く経済不況と戦争状態とともに逆転するだろう」(1985, p. 331)。

したがって、最近のマルクス主義の再評価はその理論的、実践的次元をもつ。一方で、新しい理論の追求は、ロシア革命の直後のそれと似通ったマルクス主義の創造的革新を導くだろう。他方で、南ヨーロッパ、南アフリカ、そして東欧における権威主義的体制の相対的に平和的な分解と、続いて起こった代議制的な参加民主主義の経験は、民主主義と社会主義の新しい社会を追求する可能性を明らかにしてきた。同時に、中央アメリカにおける革命的コースは、平和的な道がすべての状況において可能ではないということを明らかにしている。したがって、理論と実践においてマルクス主義は、現代の国際的資本主義がその政治的経済的内容において資本主義と社会主義の両方を再形成するのに応じて、再生をつづけるであろう。

References

- Althusser, L. 1969. *For Marx*. London : Allen Lane.
- . 1971. "Ideology and Ideological State Apparatuses (Notes Towards an Investigation)." In *Lenin and Philosophy and Other Essays*, 127-86. New York : Monthly Review Press.
- Althusser, L. and Balibar, E. 1970. *Reading Capital*. London : New Left Books.
- Amin, S. 1976. *Unequal Development : An Essay on the Social Formations of Peripheral Capitalism*. New York : Monthly Review Press.
- Anderson, P. 1980. *Arguments within English Marxism*. London : Verso.
- . 1983. *In the Tracks of Historical Materialism*. London : Verso.
- Bahro, R. 1984. *From Red to Green*. London : Verso.
- Bardhan, P. 1983. *Land, Labor and Rural Poverty : Essays in Development Economics*. New York : Columbia University Press.
- Becker, D. G. ; Frieden, J. ; Schatz, S. P. ; and Sklar, R. L. 1987. *Postimperialism, International Capitalism and Development in the Late Twentieth Century*. Boulder : Lynne Rienner Publishers.
- Bell, D. 1960. *The End of Ideology*. Glencoe : Free Press.
- . 1976. *The Coming of Post-Industrial Society*. Harmondsworth : Penguin.
- Benton, T. 1984. *The Rise and Fall of Structural Marxism*. New York : St. Martins.
- Bertram, C. 1988. "A Critique of John Roemer's Central Theory of Exploitation." *Political Studies* 36 (March) : 123-30.
- Block, F. 1987. *Revising State Theory : Essays in Politics and Postindustrialism*. Philadelphia : Temple University Press.
- Bloom, A. 1986. *The New York Intellectuals and Their World*. Oxford : Oxford University Press.
- Bowles, S. and Gintis, H. 1986. *Democracy and Capitalism : Property, Community, and the Contradictions of Modern Social Thought*. New York : Basic Books.
- Burawoy, M. 1985. *The Politics of Production : Factory Regimes under Capitalism and Socialism*. London : Verso.
- . 1989. "Marxism without Micro-Foundations." *Socialist Review* 19 (2) : 53-86.
- Callinicos, A. 1976. *Althusser's Marxism*. London : Pluto Press.
- . ed. 1989. *Marxist Theory*. New York : Oxford University Press.
- Carling, A. 1986. "Rational Choice Marxism." *New Left Review*, no. 160 (November-December) : 24-62.
- . 1988. "Liberty, Equality, Community." *New Left Review*, no. 171 (September-October) : 89-111.
- . 1990. "In Defense of Rational Choice : A Reply to Ellen Meiksins Wood." *New Left Review*, no. 184 (November-December) : 97-109.
- Carrillo, S. 1978. *Eurocommunism and the State*. Westport, CT : Lawrence Hill and Co.
- Chilcote, R. H. 1990. "Post-Marxism : The Retreat from Class in Latin America." *Latin American Perspectives* 17 (Spring) : 3-24.
- . 1991. "Capitalist and Socialist Perspectives in the Search for a Class Theory of the State and Democracy." In *Comparative Political Dynamics : Global Research Perspectives*, ed. R. Dankwart and K. Rustow, 75-97. New York : Harper and Row.
- Claudin, F. 1978. *Eurocommunism and Socialism*. London : New Left Books.
- Cohen, G. A. 1978. *Karl Marx's Theory of History : A Defense*. Princeton : Princeton University Press.
- Cooney, T. A. 1986. *The Rise of the New York Intellectuals : Partisan Review and Its Circle*. Madison : University of Wisconsin Press.
- DeGeorge, R. T. and DeGeorge, M., eds. 1972. *The Structuralists : From Marx to Lévi-Strauss*. Garden City, NY : Anchor Books.
- Dussel, E. 1990. "Marx's Economic Manuscripts of 1861-63 and the Concept of Dependency." *Latin American Perspectives* 17 (Spring) : 62-101.
- Ehrenreich, B. 1989. "Rebels without a Clue." *Zeta Magazine* 2 (March) : 12-14.
- Ehrenreich, B. and Ehrenreich, J. 1977. "The Professional-Managerial Class." *Radical America* 11 (2).
- Elliott, G. 1987. *Althusser : The Detour of Theory*. London : Verso.
- Elson, D. 1988. "Market Socialism or Socialization of the Market?" *New Left Review*, no. 172 (November-December) : 3-44.
- Elsner, J. 1985. *Making Sense of Marx*. New York : Cambridge University Press.
- Flacks, D. 1989. "What Happened to the New Left?" *Socialist Review* 19 (1) : 91-110.
- Foster-Carter, A. 1978. "The Modes of Production Controversy." *New Left Review*, no. 107 (January-February) : 47-77.
- Frankel, B. 1987. *The Post-Industrial Utopians*. Madison : University of Wisconsin Press.
- Geras, N. 1986. "Althusser's Marxism : An Account and Assessment." In *Literature of Revolution*. London : Verso.
- . 1987. "Post-Marxism?" *New Left Review*, no. 163 (May-June) : 40-82.

- . 1988. "Ex-Marxism without Substance : Being a Real Reply to Laclau and Mouffe." *New Left Review*, no. 169 (May-June) : 34-61.
- Gerstein, I. 1989. "(Re)Structuring Structural Marxism." *Rethinking Marxism* 2 (Spring) : 104-33.
- Gitlin, T. 1987. *The Sixties : Years of Hope, Days of Rage*. New York : Bantam.
- Godelier, M. 1973. "Structure and Contradiction in Capital." In *Ideology in Social Science*, ed. R. Blackburn, 334-68. New York : Vntage Books.
- Goodwin, J. 1990. "The Limits of 'Radical Democracy'." *Socialist Review* 20 (4) : 131-44.
- Gorz, A. 1980. *Farewell to the Working Class*. London : Pluto Press.
- Hartley, G. 1989. "Rearticulating Marxism." *Socialist Review* 19 (April-June) : 139-46.
- Hartman, H. 1981. "The Unhappy Marriage of Marxism and Feminism : Towards a More Progressive Crisis." In *Women and Revolution*, ed. L. Sargent, 1-42. Boston : South End Press.
- Hindess, B. 1978. "Classes and Politics in Marxist Theory." In *Power and the State*, ed. G. Littlejohn et al. London : Croom Helm.
- Hindess, B. and Hirst, P. Q. 1975. *Pre-Capitalist Modes of Production*. London : Routledge and Kegan Paul.
- . 1977. *Mode of Production and Social Formation : An Auto-Critique of Pre-Capitalist Modes of Production*. New York : Macmillan.
- Hobsbawm, E. 1989. "Farewell to the Classic Labour Movement ?" *New Left Review*, no. 173 (January-February) : 69-74.
- Isaac, J. C. 1987. *Power and Marxist Theory : A Realist View*. Ithaca : Cornell University Press.
- Isserman, M. 1987. *If I Had a Hammer.....* New York : Basic Books.
- Jacoby, R. 1987. *The Last Intellectuals : American Culture in the Age of Academe*. New York : Basic Books.
- Jessop, B. 1985. *Nicos Poulantzas : Marxist Theory and Political Strategy*. London : Macmillan.
- Kadarlitsky, B. 1988. *The Thinking Reed : Intellectuals and the Soviet State, 1917 to the Present*. London : Verso.
- Kennedy, P. 1987. *The Rise and Fall of the Great Powers*. New York : Random House.
- Kieve, R. A. 1988. "A Review of John Roemer (ed.), *Analytical Marxism*." In *Science and Society* 52 (Summer) : 229-32.
- Kolko, J. 1988. *Restructuring the World Economy*. New York : Pantheon.
- Laclau, E. and Mouffe, C. 1985. *Hegemony and Socialist Strategy : Towards a Radical Democratic Politics*. London : Verso.
- . 1987. "Post-Marxism without Apologies." *New Left Review*, no. 166 (November-December) : 79-106.
- Lebowitz, M. A. 1988. "Is 'Analytical Marxism' Marxism ?" *Science and Society* 52 (Summer) : 191-214.
- Lefort, C. 1986. *The Political Forms of Modern Society*. Ed. J. B. Thompson. Cambridge : MIT Press.
- Levine, A. ; Sober, E. ; and Wright, E. O. 1987. "Marxism and Methodological Individualism." *New Left Review*, no. 162 (March-April) : 67-84.
- Marable, M. 1983. *How Capitalism Underdeveloped Black America*, Boston : South End Press.
- Marx, K. and Engels, F. 1970. *The German Ideology*. Ed. C. J. Arthur. New York : International Publishers.
- Mayer, T. F. 1989. "In Defense of Analytical Marxism." *Science and Society* 53 (Winter) : 416-41.
- Miliband, R. 1985. "The New Revisionists in Britain." *New Left Review*, no. 150 (March-April) : 5-26.
- . 1989. "Reflections on the Crisis of Communist Regimes." *New Left Review*, no. 177 (September-October) : 27-36.
- Miller, J. 1987. *Democracy Is in the Streets*. New York : Simon and Schuster.
- Nelson, C. and Grossberg, L., eds. 1988. *Marxism and the Interpretation of Culture*. Chicago : University of Illinois Press.
- Poulantzas, N. 1973. *Political Power and Social Classes*. London : New Left Books.
- . 1976. *Crisis of the Dictatorships : Portugal, Greece, Spain*. London : New Left Books.
- . 1978a. *State, Power, Socialism*. London : New Left Books.
- . 1978b. "The State and the Transition to Socialism." *Socialist Review* 7 (March-April) : 9-36.
- Przeworski, A. 1985a. *Capitalism and Social Democracy*. Cambridge : Cambridge University Press.
- . 1985b. "Marxism and Rational Choice." *Politics and Society* 14 (4) : 379-409.
- . 1989. "Class, Production and Politics : A Reply to Burawoy." *Socialist Review* 19 (2) : 87-111.
- Resnick, S. and Wolff, R. D. 1987. *Knowledge and Class : A Marxian Critique of Political Economy*. Chicago : University of Chicago Press.
- Rey, P.-P. 1973. *Les alliances de classes*. Paris : Maspero.
- Roemer, J. 1982. *A General Theory of Exploitation and Class*. Cambridge : Harvard University Press.
- . ed. 1986. *Analytical Marxism*. Cambridge : Cambridge University Press.
- . 1988. *Free to Lose : An Introduction to Marxist Economic Philosophy*. Cambridge : Harvard University Press.
- . 1989. "Visions of Capitalism and Socialism." *Socialist Review* 19 (July-September) : 93-100.
- Ross, A., ed. 1988. *Universal Abandon ? The Politics of Post-Modernism*. Minneapolis : University of Minnesota Press.

- Ruccio, D. 1988. "The Merchant of Venice, or Marxism in the Mathematical Mode." *Rethinking Marxism* 1 (Winter): 36-68.
- Ruccio, D. and Simon, L. H. 1986. "Methodological Aspects of a Marxian Approach to Development: An Analysis of the Modes of Production School." *World Development* 14 (February): 211-22.
- Shaw, W. H. 1978. *Marx's Theory of History*. Stanford: Stanford University Press.
- Smith, T. 1989. "Roemer on Marx's Theory of Exploitation: Shortcomings of a Non-Dialectical Approach." *Science and Society* 53 (Fall): 327-40.
- Szymanski, A. 1985. "Crisis and Vitalization in Marxist Theory." *Science and Society* 49 (Fall): 315-31.
- Thompson, E. P. 1978. *The Poverty of Theory and Other Essays*. London: Merlin Press.
- Wald, A. M. 1987. *The New York Intellectuals: The Rise and Decline of the Anti-Stalinist Left from the 1930s to the 1980s*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Wallerstein, I. 1975. "Class-Formation in the Capitalist World-Economy." *Politics and Society* 5 (3): 367-75.
- . 1986. "Marxisms as Utopias: Evolving Ideologies." *American Journal of Sociology* 91 (May): 1295-308.
- Wolff, R. D. and Resnick, S. 1986. "Power, Property, and Class." *Socialist Review* 16 (March-April): 97-124.
- . 1987. *Economics: Marxian versus Neoclassical*. Baltimore: Johns Hopkins Press.
- Wood, E. M. 1986. *The Retreat from Class: A New 'True' Socialism*. London: Verso.
- . 1989. "Rational Choice Marxism: Is the Game Worth the Candle?" *New Left Review*, no. 177 (September-October): 41-88.
- Wright, E. O. 1978. *Class, Crisis, and the State*. London: New Left Books.
- . 1984. "A General Framework for the Analysis of Class Structure." *Politics and Society* 13 (4): 383-423.
- . 1985. *Classes*. London: New Left Books.
- . 1988. "Exploitation, Identity, and Class Structure: A Reply to My Critics." *Critical Sociology* 15 (Spring): 91-110.
- . 1989. "What is Analytical Marxism?" *Socialist Review* 19 (4): 35-56.